

アダム・スミスの犯罪 — 労働価値説史の錯綜 —

馬場 宏 二

2007年11月3日～11月12日

経済理論学会第55回大会で、「スミス・マルクスの資料操作とマカロック」という報告をした⁽¹⁾。報告時間は30分。出所註まで付けたフルペーパーを別途書かねばなるまい。だがその前に、報告寸前に付けたオチ「アダムスミスの犯罪」⁽²⁾を纏めて一文とする。労働価値説の継承史に関して意外に重味を持つ事柄だからである。

スミス (Adam Smith, 1723～1790) のペティ隠しは、経済学史、特に労働価値説史にとってとんだ罪作りだった。この隠蔽がなければ、労働価値説史はリカード (David Ricardo 1772～1823) を経てヨリ鮮明な軌跡を示したろうし、マルクス (Karl Marx 1818～1883) も早トチリなどせず、本格的なペティ評価を残し得たかも知れない。スミスのペティ隠しは、経済学の流れに、通常考えられる以上に大きな否定的影響を与えたのである。

I. スミスの先学無視

『国富論』は先行研究を減多に記さない。後世の編者註は別として、スミス自ら記入したものは極めて少なく、それも大抵は再版以降の注記であり、内容的には、ギリシャ古典等術学的な文献名か、数値等単純な史実の出所注である。ここまではひとまず、当時の著作慣習に則ったと解せる範囲に入るから、特に目くじらを立てずとも良い。

だが、先行する体系的な経済理論の扱いについては、単なる社会的慣行と片づけられない。先行体系のうち、重農主義説だけは第4編第9章で纏めて正面から取り上げている。後は気付いた範囲で言えば、ペティ (Sir William Petty, 1623～1687)、マーチン (Henry Martyn, 1665～1721)、ハリス (Joseph Harris, 1702～1764)、スチュアート (Sir James Denham Steuart, 1712～1780)、チュルゴ (Anne-Robert-Jacque Turgot, 1727～1781)、の五人について

て、名前も著書名も全く挙げていない。それどころか、彼らに由来する名句の類も明示的に取り込んでないばかりかケチを付ける材料にしたりする。類似の扱いを受けたのがカンティロン (Richard Cantillon, 1680-90~1734?) で、スミスはその人名は一度挙げたが書名は挙げず、キャナン⁽³⁾の考証に拠れば『商業試論』(1755?) に全書中で10回余り依拠している。因にこの書はペティを三箇所では本格的な議論の対象としている⁽⁴⁾から、書名を挙げればペティ隠蔽が困難になったはずである。

カンティロン以外の5人の先学もそれぞれに『国富論』と内的な関連があると見得る論点を数箇所づつは示していた。スキナー・トッド・キャンベル編の新版『国富論』⁽⁵⁾では、それが多数指摘されている。スチュアートに至っては対応箇所が全書中で33回、無論大多数が『経済学原理』(1767) である⁽⁶⁾。

ここまで来ると、慣行上不要だったとかスミスが知らなかったための不記入とは解せなくなる。スミスは先行説を承知の上で隠蔽したのである。しかも多少立ち入って調べると、隠蔽の痕跡が残らないよう入念に細工している。マルクスやシュムペーター (Joseph A. Schumpeter, 1883~1950) のスミス把握もそのことを示している。

なぜ念を入れた先学隠しなど行なったか。考えられるのは、伶俐で緻密でもさほど独創性のないスミスが、新興の経済学Political economyの体系全てを自分の独創だと偽装したかったことである。正直に先行諸説を挙げると自説の出場がなくなる。逆に全部自分の独創だと露骨に強調したら、かえって怪しまれる。だから『国富論』では重農学派を取り上げて、評価しつつ批判することで自分の理論的優位を示し、それ以外を全部隠蔽した。いわば新興学問の形成に関わった学者の功名心の産物であり、虚栄のために知的誠実を犠牲にしたのである。しかも隠蔽が極めて巧妙だったから、後世はスミスが実際に経済学の創始者だと思い込んだ。とりわけ日本では、戦時の思想弾圧下でマルクスを論じたかった左翼学究が、身の安全のためにスミスかヴェーバーに逃げ込んだから、この二人の救いの神はとりわけ神聖化された。今日高校世界史的常識では、アダムスミス = 『国富論』 = 最初の経済学、学説史上の名著として今なお評判高いのが『国富論』を指す『経済学の生誕』⁽⁷⁾ である。

スミスが先学を意図的に隠蔽した事実は、『国富論』初版200年記念の出版物⁽⁸⁾とりわけ『アダムスミス書簡集』や新編『国富論』で証拠立てられつつある。先に挙げた五人のう

ち、未だに明白な証拠が指摘されていないのは唯一ヘンリ・マーチンだが、それは主として、無署名の『東インド貿易の考察』、再版名『イギリスにとっての東インド貿易の利益』⁽⁹⁾の著者が、マーチンであると確定し周知され始めたのがやっと1983年だった⁽¹⁰⁾という事情に由来する。キャンナンにしろスキナーらしろ無署名のこの書を改めて対照する必要など感じなかったのだろう。

II. スミスのペティ隠し

スミスが、ペティの曾孫で遺産継承者ランズダウン侯爵となったシェルバーン伯爵二世と、その子エドモンド・フィッツモーリスを自宅に預かって教育するほど深く付き合い合っていたことは、「ペティと『国富論』」⁽¹¹⁾でスミスの手紙⁽¹²⁾を引用しながら示した。そのスミスが、経済学者ペティを知らなかったなどとは考え難いが、手紙では大地主で領地開発者だったと知っていたことは判っても、経済学者と知っていた証拠はすぐには掴めない。間接的な傍証なら多々あり⁽¹³⁾、中でも、出入りの出版社ファウルズがペティ『政治算術』を含む経済学の古典名著をいくつか復刻したが、その中でただ一つ、ペティ『政治算術』だけはスミスの遺品に含まれなかった⁽¹⁴⁾などは、いささか手の込んだ証拠隠しと解せなくもないが、おまけにそこへ、政治算術Political Arithmeticに関するケチ付けが加わるのである。

これも大筋はすでに書いたことだが、『国富論』第4編第5章で、イングランドの穀物の輸出依存度と輸入依存度の数値を挙げ、それに「私は政治算術をあまり信用していない。そこで私はこれらの計算のどちらについても、正確さを保証しようとは思わない」⁽¹⁵⁾と付け加えている。この一文が、政治算術なる語に対するケチ付け以外の何物でもないことはすぐ判る。アダム・スミスは、この数値をチャールズ・スミスの『穀物三論』⁽¹⁶⁾から引用しているが、同書を『国富論』で都合5回引用し、3箇所「独創的で事情に通じた著者」⁽¹⁷⁾などと褒めていた。ホメてきた著者の数値を突如「正確さを保証しようとは思わない」と突き放したのである。政治算術とはいい加減なものだと一度は言いたかったスミスの執念が、機を得て噴出したとでも解する他はない。スミスは「政治算術」がペティ由来だからいはい百も承知だったろう⁽¹⁸⁾。『国富論』で他にもう一つ政治算術と書いたのは、グレゴリ・キングの数値を利用した際に「ダヴィナント博士がその政治算術についての熟練を激賞したグレゴリ・キング氏」⁽¹⁹⁾という箇所である。ここでは自分が依拠したキングが信頼出

来ると言うために、政治算術をむしろプラスの意味で使った。それなのにチャールズ・スミスに対しては、信用出来ない論拠として、チャールズがどこでも使っていない「政治算術」が信用出来ないから不正確だと言い、しかもスミス生前版の『国富論』に付した索引では、代名詞的用法を含めれば都合三回使った「政治算術」を全く拾っていない。「政治経済学」を代名詞的用法を含めて多数拾ったのとは大きな差があり⁽²⁰⁾、ここにも政治算術に対する反発が覗いている。

シュムペーターがスミスの政治算術不信に不審感を抱き、それがペティ隠蔽効果を持つたと解していたことも上記拙稿で示した。ただシュムペーターの文には解かり難いところがある。「…ペティの人を鼓舞するようなメッセージや示唆に富むプログラムは、かのスコットランドの教授の堅苦しい筆致のなかに枯れ萎んでしまって、二五〇年の間大多数の経済学者には殆ど看過されてきたのである。アダムスミスが政治算術には大した信頼を置かないと宣言したとき、彼はただその性分に従って大事をとっていたに過ぎなかった⁽²¹⁾。表向きは、スミスが念を入れたつもりで断ったのに結果的にペティを経済学史から消すことになったとなるが、チャールズ・スミス引用法まで考慮に入れると、「大事をとったに過ぎない」などという言い回しが、わざとらしいスミスへの遠慮であることが判り、それを除けば、スミスが政治算術は信用出来ないといったためにペティが消されたという趣旨になる。それに「250」年が何時から何時までか解からない。『国富論』以後なら、今でもまだ250年は経っていないからである。

マルクスはスミスの先学隠しをもっと鮮明に示していた。『経済学批判』の貨幣論史⁽²²⁾の中で、「スミスはスチュアートの理論をだまって採用した」と言い、その直前に「かれが事実上たくさんうけたもとである、わずかなものを与えてくれた源泉を、こまかく気をつけてかくしている」「厳密に定式化するとかれの先行者たちと〔独創部分の〕差引勘定をしなければならなくなるおそれのあるところでは、問題の要点をはずすというやりかたを、たびたびえらんでいる」と述べていた。「アダムスミスのこのあまり無邪気でないまちがい」の句もある。マルクスはまた、『資本論』第12章の註(44)で、「A. スミスは分業についてはただ一つの新しい命題もたてていない⁽²³⁾と、気がつけば誰でもびっくりするような断定をしている。だがこの章に繰り返し引用されているペティ（『政治算術』か『政治算術別論』であろう）や（ヘンリ・マーチンの）『イギリスにとっての東イ

ンド貿易の諸利益』さらにマルクスの側にも多少の勇み足のある、ファーガソン『市民社会史』やマンデヴィル『蜂の寓話』などを参照すれば、確かに分業論についてスミスの独創性はなくなるのである。

先走るが、マルクスはスミスとリカードを並べて表敬している。「古典派経済学最良の代表者、アダムスミスとリカード」⁽²⁴⁾の如くに。ところが、個別に扱う時には、スミスに対しては個人レベルであげつらうことが結構多い。時にはやり過ぎて、アダム・ファーガソンをスミスの「師」にしてしまったり、スミスのある文を一字一句マンデヴィルの引き写しと貶めたり、事実合わないことまで書くが、ともかくスミスが知的に誠実ではないことを、スミスの書簡や後代の考証など知らない時点で、相当的確に嗅ぎつけていた。これに対してリカードを扱う際には、論理的批判は試みるが個人的性格を貶める批評はしない。ブルジョア嫌いのマルクスが、証券業者で大金儲けをした後に妻の療養に行った温泉で『国富論』に触れてから経済学者となったりリカードの性格は問題にせず、結婚もせずに一生学者で過ごしたスミスだけをあげつらったのは、リカードが知的に誠実なのにスミスにはそうとう怪しげなところがあることを掴んでいたからであろう。この程度のことはスミスとマルクスを虚心に読めば大抵解かる。研究者達がスミスを神格化し過ぎたため、同じく神格化したマルクスのスミス非難さえ気に止まらなかったのだろう。

III. 労働価値説の元祖とその認定

労働価値説の元祖はペティである。ペティがパリ時代にヴェサリウスを共に読むなど交流したホブズ (Thomas Hobbes, 1588~1679) が、富の源泉は労働だと述べているが、労働が価値の源泉だとまでは詰めていない。だからペティ最初の経済書『租税貢納論』(1662) が労働価値説の原初だと言って良い。実際そこで、労働価値説の基本的要件は言い尽くされているのである。

ところが不思議なことに、ペティは労働価値説を、同書の中で、分量にしてわずか100分の1くらいしか叙述せず、しかもそれを「余論」とか「副次的な問題」と自称し、後の『アイルランドの政治的解剖』や『政治算術』では全く再論しなかった⁽²⁵⁾。だからチャールズ・ダヴィナント (Charles D'Avenant, 1656~1714) やヘンリー・マーチン、さらにはリシャール・カンティロンらペティ継承者達も労働価値説を継承せず、『租税貢納論』を

労働価値説の原形と認定したのは、リカードが労働価値説を流布させた後の、独創性に乏しいとして評価されなかった経済学者、ガニル (Charles Ganilh, 1758~1836) とマカロック (John Ramsay McCulloch, 1789~1864) だった。

ガニルの『経済学体系について』 (*Des Systems d' Economy Politique*) の1809年初版は粗っぽく凡庸な本である。ところが1821年再版は相を改めており、その中に労働価値説の初発がペティであることがかなり詳しく論じられている。いわく、ヴェリ Verri やコンデヤック Condillac は商品価格は効用によると唱えたが、他の著作者は、逆に物は交換から独立した真実価値、内在価値を持つと唱えた。「ウィリアムペティがこの説を最初に提唱し、明快で知的な方法で表現した」⁽²⁶⁾。ガニルは続けて『租税貢納論』中の労働価値説相当部分を、逐語訳的に丁寧に紹介している。管見の限りで、ペティを労働価値説の起源と初めて認定したのはこの書である。

これに次ぐのがマカロックの『経済学原理』1825年初版である。同書は末尾近くの長い註で、ペティ『租税貢納論』の労働価値説を、等労働量投下による穀物と銀の等価性、穀物地代と銀貯蓄の等価性、農夫200人で100人分の仕事をするとところでは穀物価格は2倍になる、の三点を簡潔だが正確に紹介して言う。「ウィリアム・ペティは、商品の価値が生産に要した労働に依存することを明確に述べた最初期の著作者の一人である」「これらの諸行は、リカード氏があのように完全に述べた理論の最初の萌芽を示している点で興味深い」⁽²⁷⁾。出版時点から見て、マカロックがガニルを読んでいた可能性はあり、ペティ起源説はマカロックの独創とは限らない。だが彼は自分の言葉でペティの説を正確に紹介し、それをリカードに繋がる指摘した。これはVIで触れる、マルクスの早トチリとの関係で重要な意味を持って来る。

さてマカロックはこの20年後に『経済学文献分類目録』⁽²⁸⁾なる読書案内を出版する。マルクスが『資本論』で悪口を言う材料として繰り返し引用した書だが、実は大変な著作である。近代の経済学文献およそ1000点を、分野別に20に分類し、分野ごとに刊行年次順に配列して、書名や論文名・掲載誌等書誌学的事項を明示した後、細かい活字で意義内容の紹介やマカロック自身のコメントを長短さまざまに付している。経済学史の素材提供とも言えようが、それ自身イギリス最初の経済学史かも知れない。これによってスミスが隠蔽した先学の説は殆ど全て知り得る。スミスが残した経済学史上の欠陥はこの書で埋められ

たのである。

中でもマカロックが1824年の『経済学講義』以来注目していたペティやマーチンは詳しく紹介される。この二人に加えてハリスを重視したことがマカロックの大貢献だが、本稿の主題に即してペティに絞れば、著作のうち『貨幣小論』、『政治算術数論』、『租税貢納論』を紹介し、『アイルランドの政治的解剖』の紹介にはペティの正確な略歴を付けた。グラント『死亡率表の政治的考察』の真の著者がペティだとの説があることについての考証もあり、全書でペティの人物学問の概略が判る。『租税貢納論』紹介では「商品価値がその生産に要した労働量によって定まると言うリカード氏によって打ち立てられた根本原理を明白に述べている」⁽²⁹⁾と記している。

スミスが意図的に空けた大穴を埋め、ペティ労働価値論起源説を、仮に独創ではなかったとしても改めて明示し繰り返したとは、それだけでも学説史家マカロックの、大きな功績だったと言えよう⁽³⁰⁾。

IV. ペティの本領と労働価値説

ここではペティの体系の概要と、その中での労働価値説の意味を洗って置く。彼は僅かの紙幅の中で労働価値説の基本的要件を全て述べていた⁽³¹⁾。しかもそれは租税論中の余論であり副次的な問題だった。後のリカードやマルクスのように労働価値説を軸として全体系を展開したのではなく、別の把握による全体系の中の特論、現物地代と金納地租の比率を算定する問題の解法として、投下労働量を取り上げたのである。特論としての意識があったからこの解法を余論と自称し、後の書でも繰り返さなかった。この説を直接継承するものが長く現れなかったのは、おそらく、主としてこのせいである。

ペティの本領は、経済社会の数値による把握だった。彼は多くの才能を持っていたが、中でも驚くべきはその数値感覚だった⁽³²⁾。ろくな社会統計のない時代に、死亡表といった僅かの資料と、驚くべく的確で深遠な推理とによって経済社会の実態を把握しようと試み、今日の国民経済分析の原形に当る成果を挙げた。その中で彼はいくつかの換算問題—複数の経済量の同種化—に迫られた。その中心は、富の二源泉とした土地と労働の、価値としての同種化であった。彼はホッブズの、「物資の豊富についていえば、それは（われわれの共通の母の二つの胸である）陸と海とから、神が通常、人類に無償で与えるか労働に対

して販売する、諸財貨に、自然によって限定されることがらである」⁽³³⁾と言う説を、ヨリ世俗的人間中心主義的に言い換えた「土地が富の母であるように労働はその父である」⁽³⁴⁾から出発する。土地と労働、これがペティ経済学体系の出発点である。そして、全経済の量的把握を志すペティにとって、最大の難問をなしたのが、土地と労働の価値的通算方法だった。それは本来不可能事である。だからさすがのペティも長期に亘ってこの問題を考え続け、その挙げ句、これを「経済学PoliticalEconomiesの中心的課題」⁽³⁵⁾だと指摘しながら、結局は便法を提示しただけで本質的な解法は諦めたのである。

念のためにペティの論述を追っておけば、先の、労働が富の父・土地が富の母と言う文句のかなり前に、「すべて物は二つの自然的単位名称、すなわち土地および労働によって価値づけられねばならない」「ともに土地およびそれに投ぜられた労働の創造物であるからである」「土地と労働のあいだに一つの自然的等価関係を発見し得るならば、われわれはさぞうれいであろう」⁽³⁶⁾という一連の文がある。実際ペティはこの「自然的等価関係」を発見し得ず、すぐ続けては、地価は土地収益に購買年数を掛けて産出するという認識、言い換えれば地代の利子率による資本還元としての地価の算定法を示したに留まった⁽³⁷⁾。そして問題は後の著作『アイルランドの政治的解剖』に持ち越されたが、そこでも本質的解決には至らなかった。ここではペティは実際の必要にも迫られてアイルランド各地の地価の算定を試みるのだが、その中へ本質的な問題を含めて言う。あらゆる土地の三年平均の生産物量が判ればその土地の自然的価値が知られる。「できることならその土地で働いている人民の雇賃をさしひくことによって生産物の価値したがってその土地の価値の認識に行き着きたいと思う」。このことが「政治経済学PoliticalEconomiesにおけるもっとも重要な問題、すなわちあらゆる物の価値を、いずれか一方のもののみによって表現するために、どのようにして土地と労働とのあいだに同価・均等の関係をつくりあげるかという問題の考察へと私をみちびく」⁽³⁸⁾と。ここは英語のPoliticalEconomyという語の初出であり、その意味でも注目すべき箇所だが、内容は既述の地代の算定と同じで、土地の総生産物から労働者の消費部分をさし引いた残りが地代になると繰り返したに過ぎない。そして「一人の成人男子の日々の労働ではなくて日々の食物が、平均的には価値の共通の尺度である」とし、技芸すなわち精神労働と単純労働の換算関係にもふれた後「当面の問題にかえろう、生産された物品の量はその土地の諸効果を示し、その土地のうえに生活している人民の数

はその物品の価値を示す」と言いながら、結局「諸々の土地の価値を知ることについて、このような補助手段を私はまだ提供できない」⁽³⁹⁾と告白する。日々の投下労働の代わりに労働者の食物つまり投入労賃を使う便法は『租税貢納論』にも見られた。ペティのような数値感覚の優れた人にとっては、概念上の差が判ったとしても、大差がなければ計測の容易な数値を使うことは起こり得ることである。しかし、労賃と地価では次元が異なる。土地は自然物で再生産にとっての枠組であり、それ自身の価値は持たず、地価は土地所有権に貨幣価格を擬制したものである。他方労働は人間の主体的活動であり、労賃は労働力提供者の再生産費の集計に当たる。自然物である土地と主体的行為の提供者の維持費との間に「自然的等価関係」を見出すことは出来ない。富の源泉として土地と労働が同格なので、価値の源泉としても同格であると考えたかっただろうが、富は自然と人間の関係を基本とするのに対して価値は人間相互の関係である。ナマな自然をその中へいきなり溶かし込むことは出来ない。ペティが、説明不十分ながら解決を放棄したのは、かえって彼の論理感覚の卓越ぶりを示すものであった。

これに比べれば、特論である銀と穀物の換算関係は、労働生産物として同じ次元にあるだけに、はるかに透明である。ペティ自身、おそらく自分の発見をさほど大したものだとは思っていなかったであろう。とはいえ、これが後世、経済学諸説の機軸となるべき労働価値説の初出だった。

ペティの労働価値説については、既に総括したことがある⁽⁴⁰⁾。詳しくはそれを御参照願うことにして以下要点だけ述べれば、第一に、生産に要する投下労働量が等しい二商品、穀物と銀の価値は等しい。第二に、特定商品の価値はその商品の生産性に逆比例して増減する。これは銀であろうと穀物であろうと同じである。第三に、如何なる商品も一定期間の総生産物から生産に要した労働者の消費を差し引いた純所収net proceedを産み、労働者の消費が等価だから純所収の価値も等しい。穀物の場合は収穫から種子と労働者の消費分をさし引いた残りが地代になる。銀の場合は産銀量から産銀労働者の消費財購入分の銀を差し引いた貯蓄が出る。地代と貯蓄が等価だと言うのである。このすぐ後に問題が残る発言がある。「銀に従事するには、穀物のそれよりも一層多くの技芸と危険とがありうるとしたところで、すべての事態は結局同じことである」⁽⁴¹⁾と。ペティは100人の労働で10年生産すれば同じになると、大量観察によって切り抜けたつもりでいるが、産銀労働が熟練労

働なら、穀物と等量の労働を投下すれば銀の価値が大きくなる。仮に熟練が労賃に跳ね返るなら、「純所収」は同じにならない。投下労働量と投入労働力費用は、時間賃金率が成立していると計数的に並行するが、概念上同じではない。さすがのペティも、数値感覚が良くて近似を捉え易かっただけに、概念上の差を無視してしまったのである。

V. ペティとリカード

ペティとリカードは極めて近い資質の持ち主だった。大金を儲けて蓄財をした後で経済学に入った経歴も良く似ているが、経済学で示す数値感覚の異常な良さ—あるいはこれが蓄財の条件だったかも知れない—が共通している。スミスはこの点では遙に及ばない。マルクスに至ってはペティを、最後には「天才的で独創的な経済学者」などと褒めたものの、その数値感覚の良さ自体を感知し得なかった。

ペティの特論である労働価値説に至っては、誰にも継承されなかった。強いて言えばスミスよりやや前のフランクリン⁽⁴²⁾が口真似をした程度である。人々がペティの労働価値説への貢献に気付いたのは、リカードが『国富論』の内在的批判によって労働価値説を体系化し、その説が普及して後であり、経済学史に詳しいガニルやマカロックがようやく、ペティの貢献を改めて発見した—と解される。この過程は、労働価値説自体において、ペティ説とリカード説が極めて近いことの証明でもある。

だがリカード自身はペティの存在を知らなかった。『経済学および課税の原理』⁽⁴³⁾の「序言」でリカードは、経済学の発展に寄与した論者の名前を一纏めに掲げている。チュルゴ、スチュアート、スミス、セイ、シスモンディ。この後に別途マルサスの名がある。マルサス、セイ、シスモンディはリカードの同時代人であり、直接的交流もあった。スミスはリカード唯一の師である。チュルゴとスチュアートは『国富論』では隠蔽されており、リカードが如何にしてこの二人を知ったかは不詳だが、リカードから見て半世紀ほど前の人だから、知っていても不思議はない。問題は150年前のペティである。

仮にリカードが学者育ちなら、学問史として先学ペティに辿り着いていても不思議はない。ところが生憎リカードは高等教育を受けていない証券業者である。趣味の学問はいろいろ手掛けたようだが、一般教養としての学問史にまでは手が回らなかったろう。だからペティを知らなかったとしても、さほど責められることではない。彼がスチュアート『経

『経済学原理』を精読したなら、そこにペティが数回出てくるからペティの名に触れる機会はあった。とはいえ精読したか否かは判らず、スチュアートは数値の典拠としてペティの名を挙げただけで、カンティロンのように議論の対象としていない。だからペティを引き出すことは結局不可能だったと言って良い。

歴史上の仮定だが、仮にリカードがペティを読んでいたら、何も書き残さなかったとは考えられない。同じように数値感覚が鋭く、ペティの方が大掴みでリカードの方が緻密という差はあるにしても、滅多にない共通性だから、内的に共鳴するところが大きかったろう。労働価値説に至ってはなおさらである。スミスを批判した眼でペティを見たら、我が意を得たと感じたに違いない。リカードがペティを知っていたら、労働価値説の継承史は、現在より遙に鮮明な太い線で描かれたに違いない。スミスは虚栄心から、知っていたペティを『国富論』から抹殺した。彼の価値論はペティ→リカードの線上からはかなり外れている。だからスミスが労働価値説の正嫡の継承者と自称する必要も権利もない。しかし彼は、ペティを抹消したことで労働価値説の起源そのものを消去してしまったのである。その思わぬ副産物が、後継者リカードによる、有り得べかりしペティ注解の消失だった。

これは労働価値説史にとって最大の痛恨事である。「アダムスミスの犯罪」とはこのことに他ならない。しかもそれはさらに副産物を産んだ。それが労働価値説史に関するマルクスの早トチリ、延いてはマルクスのペティ評価の不徹底である。

VI. マルクスの早トチリ

マルクスのペティ評価は、教条主義的注解のおかげで、とんだ歪みを持たされてしまった。たとえばマルエン全集版『資本論』の「人名索引」に言う。サー・ウィリアム・ペティ、「イギリスの経済学者、統計学者。[近代経済学の創設者、最も天才的で最も独創的な経済学研究家のひとり] (マルクス)。古典派的ブルジョア労働価値説を主張した」。このうち、マルクスからの引用とされているのは、マルクスが『反デューリンク論』で最後にたどり着いたペティ評価だが、古典派的ブルジョア労働価値説などと言う言い回しはマルクスのものではなく、おそらく全集版の編集者が、政治的偏見か身の安全を図るために決まり文句を継ぎ足したものだろう。

この種の政治的偏見や身の安全のための機械的マルクス引用は随所に見られる。アダム

・ファーガソンを「アダム・スミスの師」とするのは、確かにマルクスがそう書いているのだが、史実を全く調べていないからである。ファーガソンはスミスと同年、学界へ登場したのはスミスの方が先でスミスが大学のポストの世話をしようとしたことさえあったと言う⁽⁴⁴⁾から、師弟関係はありえない。マルクスが何回か師弟扱いしたのは、皮肉でなければマルクスが時々やらかす、数値や年代の勘違いのせいである。マカロックは「スコットランドの経済学者、リカードの学説を通俗化した、資本主義の弁護論者」とあるが、マルクスに倣って学説史上の貢献を無視し階級調和論的であったこと⁽⁴⁵⁾も全く無視した、悪意の評価に終わっている。マルサスは「イギリスの聖職者、経済学者、ブルジョア化した土地貴族のイデオロク、資本主義の弁護論者、資本主義のもとでの勤労者の貧困の正当化を目的とする反動的な過剰人口論をあみだした」。マルクスが非難しながらも経済学者扱いしていたのも知らぬげなコミンテルンの悪口雑言である。この種の注解付きで『資本論』を学んだら、自分の頭で考えず、学説史にも歴史的事実にも無関心な、神学的マルクス主義経済学者しか育たない。ここでは詳説しないが、新MEGAにおけるマカロック『経済学文献分類目録』からの抜粋分には、神学に合わせるために原ノートを偽造した疑いさえある。MEGA編集者による偽造でなかったら、マルクスの方がよほどおかしいのである⁽⁴⁶⁾。

ペティ評価に戻る。マルクスは結局ペティを評価しきれなかった。それはマルクスのペティ評価を、時代を追って見ると判る。

彼がペティの名に触れたのはおそらく1845年にブリュッセルでフランス語の経済学を纏めて読んだ時からであろうが⁽⁴⁷⁾、著作に名を出したのは『哲学の貧困』からである⁽⁴⁸⁾。だがこれはプルドンの揚げ足を取るためにペティ地代論の断片を使ったに過ぎず、全体的体系的なペティ評価を示していない⁽⁴⁹⁾。

マルクスがペティを本格的に取り上げたのは『経済学批判』⁽⁵⁰⁾からである。その第一章「商品」では、ウィリアム・ペティの名が、まず「労働は富の父であり、土地はその母である」と言ったとの、孫引き的引用⁽⁵¹⁾とともに出て来る。ついで、商品に関する学説史の中で有名な「イギリスではウィリアム・ペティ、フランスではボアギュベールに始まり、イギリスではリカード、フランスではシスモンディにおわる古典派経済学」⁽⁵²⁾との命題があり、続いてペティが商品の使用価値を労働に帰し、現実的労働を分業として捉えた、ボアギュベールは労働時間が特定の産業部門に配分される割合によって「真実価値」を規定

した、フランクリンは「交換価値をはじめ意識的に、ほとんど誰にもわかるほど明晰に分析して労働時間に帰した」⁽⁵³⁾、と述べている。第二章貨幣でもペティは二度扱われるが、当面第一章だけで良い。ここで既に、理解不能な早トチリが現れているのである。

労働価値説の始祖はペティである。なぜフランクリンなど書いたのか。実はこの時点(1859年)では、マルクスは『租税貢納論』を読んでいなかった。『経済学批判』で引用されるペティは『政治算術』と『政治算術別論』だけである。だから「労働は富の父、土地はその母」というペティの名文句には引用註がない、つまり記憶による孫引きである。マルクスが『租税貢納論』を読んでその労働価値説を掴んでいれば、ここで労働価値説の始祖として引用したフランクリンの文章⁽⁵⁴⁾を見ればただちに、これはペティの言い換えに過ぎないと指摘したはずである。ペティ説に気付いたことは褒めても、最初の説だなどと持ち上げるはずはない。

フランクリンがどこで紛れ込んだか判然としない⁽⁵⁵⁾。1858年4月2日付けのエンゲルス宛の手紙—『経済学批判』が資本、土地所有、賃労働、国家、国際貿易、世界市場の六部に分けられると言うプランを記したので有名な手紙—で、プランにすぐ続けて、価値が純粋に労働量に規定されると述べ、「価値のこういう規定は、ペティではじめて暗示的にあらわれ、リカードでは純粋に仕上げられている」⁽⁵⁶⁾と書いていた。フランクリンが混入する余地はなかった。だがそもそもマルクスは、この手紙のもとになる認識をどこで得たのか。

ここは今の所勘繰りでしかないが、前に紹介したマカロックの、『経済学原理』の註にある「ペティが、価値が生産に要した労働で決まると言う、リカードが仕上げた説の萌芽」との説が、どうしても想起される。マルクスは『経済学批判要綱』では明らかにマカロック『経済学原理』に何回かコメントしていた。つまり、ペティ→リカードとなる説に眼は通していたはずである。それが明確に述べられなかったのはマルクスの側に、理由不詳ながら強烈なマカロックへの偏見や蔑視があり、そのためにマカロックの議論を頭から軽視してしまうか、マカロックの功績と言いたくないばかりに意識的に無視したためだろう。マカロック軽視ないし無視の上で、イギリスのペティ、フランスのボアギルベール、新世界のフランクリンと格好良く並べたくなる誘惑があったのかも知れない。

マルクスの側に立って弁護すれば、ひとつは『租税貢納論』をまだ読んでいなかった。マカロックが一度ならず同書の労働価値説の紹介をしたのだから、マルクスが自分で当た

らなかったとすればマカロックへの偏見による軽視か無視のせいなので大した弁護にはならないが、確かな資料的根拠を掴んでいなかったために、イギリス・フランス・新大陸という格好良さに誘惑されやすかったとは言えるだろう。しかしもっと大きいのは、有り得べかりしリカードのペティ注解が、スミスの虚栄心のおかげで存在しなかったことである。マルクスが、リカードの文なら真剣に読んだろうことは明らかだから、この早トチリはなくて済んだ。そしてそれが、マルクスに余計な迂回をさせる原因にもなったのである。

『剰余価値学説史』になった1863年のノートで、マルクスは『租税貢納論』の労働価値説を丹念に抜粋した⁽⁵⁷⁾。これは彼が、ペティこそ労働価値説の始祖であると気付いた証拠である。ところがその後出版した『資本論』の1867年初版では、該当箇所にはフランクリンの名もないがペティの名もない⁽⁵⁸⁾。マルクスは自分が早トチリを犯したことに気付きながら素直に告白せず、強情にも一旦は両者を相討ちにした。マルクスもここでは知的誠実性を放棄したのである。しかしこれは長くは続かなかった。再版で補った註(17a)で、しぶしぶ「一流の経済学者のひとりで、ウィリアム・ペティについて価値の性質を見抜いた有名なフランクリン…」⁽⁵⁹⁾と述べ、ようやく御正解に辿り着いた。むろんこの程度ではペティの評価としては不十分極まる。しかし、おそらくここでペティを認めたせいだろうが、マカロックに対する誹謗⁽⁶⁰⁾は読むに耐えないものになって行った。『経済学批判』以来マカロックを非難することが多かったが、おそらく初めはマカロックの名声や地位に対する嫉妬や反権威主義的反発であり、リカード説への裏切り者征伐のつもりもあったかも知れない。それが、『資本論』現行版になると、殆ど理屈の通らない、牽強附会的悪罵の堆積になる。悪罵の理屈自体とうてい理解出来ないほどである。強いて心理を解釈すれば、自分が偏見から見落としていた正解を、とっくの昔にマカロックが述べていたことに気付き、その自責の念が転倒して、マカロックなど読むに値しない理屈抜きにバカな奴だと言う罵倒になったとでも解する他はない。

無論これではペティ評価にはならない。だからマルクスは、経済学史に関する最後の執筆機会を利用して、「近代の経済学確立者ペティ」、「ペティは商品の価値の大きさについて完全に明白な正しい分析を行なっている」「きわめて天才的で、きわめて独創的な経済学研究者」⁽⁶¹⁾と、最大限の賛辞を捧げた。この賛辞自体は誤りではない。しかし賛辞だけでペティを正確に捉えたことにはならない。ペティの最大の才は、マルクス苦手の数値感

覚だった。そこから国民経済の数量的概括が試みられ、その中にいくつかの、異質な数値間の換算問題が生じた。その中でペティ自身にとって最大の難問は、土地と労働の自然的換算方法だったが、これは本来不可能事である。それに比べればはるかにた易い換算が、現物地代と金納地租の関係、つまり穀物と銀との関係で、これはともに労働生産物だから、生産に要する投下労働の比率とすれば良く、ペティにとっては簡単なことだった。だから「余論」で「副次的な問題」だとして、その後は繰り返しもしなかった。根本的な問題は解きようがないし結局解けないままだが、「余論」は労働価値説として解けてしまった。それがペティの才の凄さだった。マルクスは早トチリをしたおかげで、結局そうした全面的な評価に辿りつけず、最大限の賛辞を奉ることで間に合わせたのである。

早トチリをしなければ真つ当な評価に辿り着いたかどうかは保証の限りではない。だがマルクスには、時間をかければ正解に行き着くという不思議な能力があった。早トチリ自体が大きな否定的要因となったこと疑いない。マルクス自身の偏見、マカロック嫌いにも責任はあるのだが、もっと根本的な原因となったスミスのペティ隠しは、経済学の歴史の流れを幾重にも歪めた、スミス自身の予期を遙に越える犯罪行為だったのである。

註

- (1) 馬場宏二「スミス・マルクスの資料操作とマカロック」経済理論学会第55年全国大会報告、2007年10月20日。丹念で有益なコメントを付けてくださった、竹永進大東文化大学教授に感謝する。
- (2) この題は、以前購入したままだった本に『マックス・ヴェーバーの犯罪』という書名があったのを思い出して急遽付けたが、報告後その羽入辰郎『マックス・ヴェーバーの犯罪』、2002年、ミネルヴァ書房を取り出して、改めて読んで見た。権威ある大学者の怪しげな資料操作を洗いなおすと、意外な偽装が見えてきて知的誠実が疑われる、とする偶像破壊的姿勢や、その推理小説的構成には筆者共鳴するところ大だが、資料操作検討の徹底ぶりは、筆者の及ぶところではない。改めて敬意を評する。
- (3) Edwinn Cannan (1861~1935) ed., *The Wealth of Nations*, 1904. 因みにこの版が1970年代まで標準版だった。大内兵衛。松川七郎訳『諸国民の富1~5』岩波文庫が、この版の邦訳である。
- (4) 馬場宏二「富概念の推移」大東文化大学経済研究所『経済研究』第20号、2007年3月、98~100ページ
- (5) R/H/Cambell & A. S. Skinner, W. B. Todd ed., *Adam Smith, An inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1981. in 2 vols. 現行の標準版である。
- (6) Sir James Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political œconomy*, 1767. 因みに上記スキナーは、同書1966年版の編集者でもある。
- (7) 内田義彦『経済学の生誕』1962年、未来社
- (8) The Glasgow Edition of Works and Correspondence of Adam Smith, I. D. D. Raphael, A. L. Macfie ed., *The Theory of Moral Sentiments*, II. Cambell, Skinner Todd ed., *The Wealth of Nations op.cit.*, III. W. P. D.

Wightam ed., *Essays on Philosophical Subjects*, IV. J. C. Bryce ed., *Lectures on Rhetoric and Belles Letters*, V. R. L. Meek, D. D. Raphael, P. G. Stein ed., *Lectures on Jurisprudence*, VI. E. C. Mossner, I. S. Ross ed. *Correspondence of Adam Smith*, VII. I. S. Ross, *Life of Adam Smith*.

以上のシリーズの内、Ⅱの新編『国富論』の编者註、Ⅵのスミス書簡集、それにⅦのスミス伝（篠原久・只腰親和・松原慶子訳『アダム・スミス伝』2000年 シュプリンガー・フェアラーク社）がこの探索にとっては有用である。他にここに挙がっていないが、Hiroshi Mizuta ed., *Adam Smith Library Catalogue* も有益である。

- (9) Anonym, *Considerations upon the East-India Trade*, 1701, London, A & J. Churchill; Anonym, *The Advantages of East-India Trade to England*, 1720, London, J. Roberts. 両書は書名は異なるが本文は全く同じである。
- (10) これはもともとマカロックが示唆し、P. J. Thomas, *Mercantilism and the East-India Trade* 1926の考証を踏まえた、Christine Mcleodの1983年の書簡発掘でようやく確定した。詳しい経緯は馬場宏二『もう一つの経済学』2005年、御茶ノ水書房、第五章「ヘンリー・マーチンの経済学」を見よ。他に、馬場宏二「P. J. トーマス『重商主義と東インド貿易』」大東文化大学『経済論集』第89号、2007年7月も参照せよ。
- (11) 馬場宏二「ペティと『国富論』」大東文化大学『経済論集』第87号、2006年7月
- (12) シェルバーン伯爵宛、1759年4月4日付け。Mossner, Ross ed., *Adam Smith Correspondence*, *op. cit.*, p. 29~30、参照前掲馬場「ペティと『国富論』」、34~36ページ。
- (13) 前掲拙稿、39~42ページ。
- (14) 前掲拙稿、44~45ページ。
- (15) Cambell, Skinner & Todd ed., *The Wealth of Nations*, *op. cit.*, pp534~535. 水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論3』岩波文庫、66~67ページ
- (16) Charles Smith, *Three tracts on the Corn Trade and Corn Laws*, London, 1766
- (17) *Wealth of Nations*, *op. cit.*, p. 461、前掲水田・杉山訳『国富論3』、15ページ
- (18) スミスの交信相手はシェルバーン伯爵二世だが、シェルバーン一世はペティの長子チャールズで、ペティが書いたのに検閲に掛かって出版出来なかった『政治算術』を、父の死後刊行した人物である。参照、ペティ、大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』岩波文庫、の「呈辭」13~17ページ
- (19) *Wealth of Nations*, *op. cit.*, p. 95, 水田・杉山訳『国富論1』、140ページ。他に前掲馬場「ペティと『国富論』」44~45ページを見よ。
- (20) 『国富論』の索引については、前掲馬場「ペティと『国富論』」の註(10)を見よ。
- (21) シュムペーター、東畑精一訳『経済分析の歴史2』、1956年岩波書店、213ページ
- (22) マルクス、武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳、『経済学批判』岩波文庫、222ページ。
- (23) 大月書店版マルクスエンゲルス全集、23a、『資本論1a』457ページ。
- (24) 前掲書108ページ
- (25) 馬場宏二前掲『もう一つの経済学』、第12章「ペティ経済学の継承」246~251ページ
- (26) Charles Ganilh, *Des system D' economie Politique*, 1821, P. 36~39
- (27) J. R. McCulloch, *The Principles of Political Economy*, 1849ed, p. 377
- (28) J. R. McCulloch, *The Literature of Political Economy : a classified catalogue of select publications...*, London, 1845
- (29) *op. cit.*, p. 318
- (30) マカロックのもう一つの功績は、ペティ・マーチン・ハリス三者を後世に読めるように計らったことである。ペティについては間接形で、『経済学文献分類目録』中で「ペティの著作集がないことが残念だ」と書いたことが、ロッシヤーとイングラムの共鳴を呼び、結局ラウンズダウン家を動かして1899年に『ペティ経済学著作集』の刊行を齎した。馬場前掲『もう一つの経済学』第12章、266~268ページ。
- (31) 参照、馬場前掲『もう一つの経済学』第12章、248~252ページ

- (32) 馬場前掲『もう一つの経済学』第9章「ペティの聖書人口学」、191～193ページ
- (33) ホップズ、水田洋訳『リヴァイアサン2』岩波文庫』第2部第24章、137ページ
- (34) ペティ、大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論』、岩波文庫、119ページ
- (35) ペティ、大内兵衛・松川七郎訳『アイアランドの政治的解剖』岩波文庫、133ページ
- (36) 前掲、ペティ、大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論』79ページ
- (37) 同上書80ページ
- (38) 前掲、ペティ、大内・松川訳『アイアランドの政治的解剖』133ページ
- (39) 同上書、137ページ
- (40) 馬場前掲『もう一つの経済学』246ページ以下
- (41) ペティ、大内・松川訳『租税貢納論』77ページ
- (42) Benjamin Franklin, *A Modest Enquiry into the Nature and Necessity of a paper Currency*, 1729, in Albert Syth ed., *The Writings of Benjamin Franklin*, 1970, vol2, p. 144
- (43) David Ricardo, *Principles of Political Economy and Taxation*, 1821年、堀経夫訳『経済学および課税の原理』リカード全集第一巻、1972年 雄松堂
- (44) ジョン・レー、大内兵衛・大内節子訳『アダムスミス伝』1972年、岩波書店
- (45) 経済学史家としての評価は、本稿並びに馬場前掲報告「スミス・マルクスの資料操作とマカロック」。階級調和論に向かっていたことについては、マカロック論自体が極めて少ないので特に挙げておくが、松井名津「J. R. マカロックとマルサス人口論」飯田祐康他編『マルサスと同時代人たち』、2006年、日本評論社所収。
- (46) 馬場前掲『もう一つの経済学』271ページ
- (47) 新MEGA, IV-3, 参照、前掲馬場『もう一つの経済学』269～270ページ
- (48) 『ドイツイデオロギー』にも出て来るが、こちらを初出とするのは難しい。参照馬場前掲書272ページ
- (49) マルクス、山村喬訳『哲学の貧困』、岩波文庫、189ページ
- (50) 前掲『経済学批判』。他に前掲馬場『もう一つの経済学』第11章「『経済学批判』の批判」も参照せよ。但しこの拙稿は、一つの註におけるマルクスのマカロック論難の奇妙さの分析に集中したため、他に批判すべき点がいくつかあるのを見落としていた。とりあえず『もう一つの経済学』282ページ、註(49)参照。
- (51) この引用には出所註がない。『資本論』第一章「商品」第二節「商品に表わされる労働の二重性」にも、同様に注なしで引用されている。
- (52) 前掲邦訳『経済学批判』岩波文庫、57ページ
- (53) 同上訳書、62ページ。但しマルクスはこの論文をフランクリンが1719年に書いて1721年に印刷したと述べているが、このままだとフランクリンが13才の年にペティからの引き写しを含む貨幣論を書いたことになる。フランクリン自伝』には1729年に書いたとあり、こちらなら納得出来る。参照馬場前掲『もう一つの経済学』259ページ
- (54) 同上書63ページ。これは、ペティ前掲邦訳『租税貢納論』76～77ページに相当する。
- (55) ここは自分で探しても見付からず、福留久大、原伸子両氏のお力も借りたが、やはり見付からない。博雅の教えを乞う。
- (56) この手紙は、前掲邦訳『経済学批判』の「付録一」に収録されている。訳書273ページ
- (57) 大月書店版マルクスエンゲルス全集、第26-I巻『剰余価値学説史I』199～200ページ
- (58) 『資本論』初版第一章にはフランクリンの名がない。初出は第二章（現行版第四章）第二節の註(34)である。*Das Kapital* 1867, S. 127
- (59) 大月書店版マルクスエンゲルス全集、第23a巻『資本論1a』69ページ。
- (60) 参照、馬場前掲『もう一つの経済学』第十章「『資本論』も読み方」。但しこれでマルクスがなぜマカロックに辛いか十分解けたわけではない。本稿では一歩進めて見たが、それだけ誤りになる危険が増えている。

- (61) エンゲルス、粟田賢三訳『反デューリンク論下』岩波文庫、第二編第十章『『批判的歴史』から』
(この章はマルクス執筆)、140, 141, 144ページ